

往復書簡(後編)

北海道で牧場経営等をされている延興雄一郎さん(株式会社ノベルズ 代表取締役)。前編でもご紹介いただいたバイオガスプラント運営等の地域貢献プロジェクトについてお話しいただきました。

拝啓 高木 勇樹様

年の瀬も間近になって参りましたが、ご健勝のこととお喜び申し上げます。

北海道十勝は、例年よりも降雪が早く、牧場も、周辺の畑も、一面の銀世界です。寒さに負けない牛たちも、生後間もない時は、飼養管理には特に特に気を配らなくてははいけません。

先月の往復書簡では、私たちノベルズグループが取り組む地域貢献のプロジェクトに、ご意見を賜り、大変有難く存じます。地域に電力と有機肥料を供給する十勝管内清水町のバイオガスプラントは、来春の操業開始に向けて建設が進んでおりますが、あらためて耕畜連携のあり方をコストやリスクの面から検証していかねければ、と気を引き締めております。

ノベルズグループは、ちょうど10年前に、私の生家が営む子牛の育成事業から独立する形で、肥育事業をスタートさせたのが始まりです。交雑種の雌牛を32カ月以上の長期飼養することで、肉に旨味を乗せて付加価値を高めると同時に、この期間に黒毛和種の子牛を生ませる事業モデルを構想し、畜産業に関わる多くの方々のご指導を受けて、ようやく事業を軌道に乗せることができました。

現在、ノベルズグループが推進している地域貢献のプロジェクトの核となるバイオガスプラントは、十勝・根釧地域における長年の試行錯誤によって培われた技術がベースになっています。自然エネルギーの利用拡大を図る政策的な後押しもいただき、事業化に踏み切った経緯もございませぬ。

畜産関係の方々、そして地域の方々のお気持ち、ご支援を受けて、初めて私たちの今日があります。感謝の言葉もございませぬ。ただ一方で、十勝の基幹産業である農業は、就業人口の高齢化や担い手不足が懸案であり、その将来が見通せない厳しい現状にあります。「ならば、自分たちにも何かできることはないか」との思いが、私たちの耕畜連携の原点です。

地域の農家の方々に目に見える形でメリットを享受していただければ、プロジェクトの成功はあります。例えば、今後、バイオガスプラントが稼働すれば、副産物として、消化液と呼ばれる有機肥料が得られますが、雑草の種子を高温で死滅させる処理を施すことから、従来の堆肥が抱える雑草の問題が克服できるとの期待があります。また、液状で保存や輸送も比較的容易で、散布用の農機の調達や

作業はノベルズグループが受け持つ計画です。消化液を活用する輪作とはどのようなものか、畑作農家の方々の共同研究も必要と考えています。その結果として、飼料向けデントコーンを栽培 提供いただければ、私たちの牧場経営に大きなプラスになります。

もつともプロジェクトは、緒に就いたばかりです。農業の経営形態が多様である以上、耕畜連携の形も、ケース・バイ・ケースで、柔軟でなければなりません。たとえ想定外の課題に直面したとしても、社員一同、力を合わせて乗り越えていく所存でございますが、地域の方々、農業に関わるの方々のご支援があつて、初めて耕畜連携があると考えております。

今後とも、ご指導、ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。日毎に寒さがつづり、体調を崩しやすい時期でもございます。どうぞ、くれぐれもご自愛ください。

平成28年12月吉日

敬具

延興雄一郎(えんよ ゆういちろう)

1978年 北海道土幌町生まれ
2006年 株式会社ノベルズを創業
株式会社ノベルズ 代表取締役。高校を卒業後、米国の肉牛牧場で1年間の研修を経験。ノベルズグループの主要8社は、肉用牛の素牛、肥育牛、生乳の生産牧場の経営のほか、交雑種雌牛の自社ブランド「十勝ハーブ牛」を扱う食品事業を展開。



拜復 延與雄一郎様

今年も早いもので師走を迎えました。

「冬来りなば春遠からじ」と申しますが、北海道十勝の冬の厳しさは、少しの降雪でおたおたする東京人には到底想像出来ないものと思います。

特に畜産という、家畜の「生命」を預かる産業の経営は、二重、三重のご苦労とのたかいかいであろうと拝察致しております。

先月の往復書簡で、地域貢献プロジェクトについて気づいた点を三ほど申し上げましたが、そのひとつひとつについての検証結果と取り組みの思い・動機を丁寧にご説明いただき、一層理解が深まりました。

地域に支えられてノベルズグループのビジネスモデルがあるのに、十勝の基幹産業の農業の将来が見通せない厳しい現実を見据えた結果の結論が耕畜連携であると。

十勝地域のように畜産・畑作混在の農業展開が可能な条件を有しているところでは、誠意的を得た視点だと思えます。

これまでも耕畜連携は政策としても熱心に取り組まれたことがありません。代表的なものが「稲わら」です。結論的に申し上げますと、畜産地帯と耕種（特に稲作）地帯が離れていることで、補助金が出ればその限りで行われ、カネの切れ目が何とやらで、定着せずに終わりました。

十勝地域は畜産、耕種（畑作）が混在する耕畜連携の基盤がしっかりとあるところです。しかもこのプロジェクトは机上の空論でなく、試行錯誤を積み上げて到達したものです。

そしてキーワードが「地域の農家の方々に目に見える形でメリットを享受していただく」ですから、成功は間違いないと確信しております。

それでも心配症の小生は、畜産をめぐるこれまでの内外の情勢変化の歴史に学ぶところがあるのではと考えてしまうのです。

直接関係ないようにみえる昨今の低迷する石油・原油市況、この背景には米国におけるシェールガス開発の成功があるのです。

電気自動車の普及がエネルギー問題に与える影響も目を離せません。他産業、異業種での技術開発、その応用・発展のスピードは加速してきており、また英国のEUからの離脱、米国でのトランプ大統領候補の勝利など内外の情勢変化は不確実性を増しています。

アンテナを高く張り、あらゆる変化のかすかな萌しにも若い感性で目をこらし、チャンスとしてください。

ノベルズグループの弥栄と十勝農業の発展をお祈りするとともに、素晴らしい佳き新年をお迎えください。

平成28年12月吉日

敬具

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

1943年 群馬県生まれ

1966年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任

1998年 農林水産事務次官、2001年退官

2002年 ㈱農林中金総合研究所理事長

2003年 農林漁業金融公庫総裁、2008年同公庫退任

2007年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国の農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

